様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月１５日現在

研究種目：基礎研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０１６４
研究課題名：（和文）アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィン』論争と「文化戦争」

研究課題名（英文）：Racial Controversy in the United States over *Adventures of Huckleberry Finn* and the Cultural Wars

研究代表者
井川 眞砂　（IGAWA MASAGO）
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：３０１０４７３０

研究成果の概要：

マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（1885）をめぐる今日の人種主義論争を、アメリカ合衆国の 20 世紀の「文化戦争」の中に位置づけ、多文化社会を迎えた現代アメリカ社会における本作品の受容の変化とその意味を考察した。
多くの人びとに親しまれてきた「アメリカ文学の古典」であるにもかかわらず、いやそれだからこそ、主人公の「自由の探求」と分かちがたく結びつく奴隷制度や「人種の壁」が扱われる本書は、作中の黒人に対する呼称（「ニガー」”nigger” の使用）や黒人描写が、今日の人種主義論争の対象となり、その社会的な存在としての受容の姿をあらわにしたのである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	５００，０００	０	５００，０００
２００７年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
２００８年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	１,５００，０００	３００，０００	１，８００，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英米文学

１．研究開始当初の背景

（１）1957 年にニューヨーク市教育委員会が『ハックルベリー・フィンの冒険』を小中学校の認定教科書リストから排除して以来、その排除決定は他州へも波及していった。
本書をめぐる人種主義論争は、教育現場にとどまることなく、マスメディアを通して一般社会に広がり、教育界や、学界、批評界をも巻き込む広範囲なものとなる。それは、合衆国における 20 世紀の「文化戦争」の中で、半世紀以上も続く長期の論争となった。1980 年代後半から 90 年代にかけて、本論争の激しさはピークを迎えた。

（２）本作品が、人種をめぐり、アメリカ社会においてこうした生なましい問題を提起し続けるこの現実にこそ、まさに「人種の壁と摩擦」が今なお残る現代アメリカ社会とその文化状況が映し出されているといえよう。

（３）本作品は、「アメリカ文学の古典」の

地位をすでに獲得しており、またそれによって、小中高等学校ならびに大学における教科書として広く採用されていた。（教科書で学んだ生徒たちの数を考慮すれば、本作品に触れたアメリカ人の数は相当数にのぼると推定される。）

（４）この長い人種主義論争の中で、アメリカ文学の批評史上重要な本作品の黒人描写に関する新たな読みが提示され、その点での大きな成果が得られたほか、学校教育現場においても貴重な成果が生まれた。

２．研究の目的

「アメリカ文学の古典」として、多くの人びとに親しまれてきた本書は、アメリカ合衆国内だけでなく、50 言語以上の翻訳によって世界のさまざまな地域でひろく読まれている。だが、本書をめぐるこうした人種主義論争は、合衆国に見られる特異な現象である。

なぜこのような論争が起こったのか、しかもそれが長期の論争になったのか。アメリカが歴史上経験した奴隷制度や、いまなお続く「人種の壁や摩擦」に関わる本論争を、20 世紀合衆国の「文化戦争」の中において考察し、多文化社会を迎えた現代アメリカ社会における本作品の受容の変化とその意味を明らかにする、それが本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）そもそも、本論争はなぜはじまったのか。ニューヨーク市教育委員会が「認定教科書リスト」から本作品を排除した理由や、そこに至った歴史的背景を考察する。

・1950 年代後半の公民権運動の高まりや広がりを理解する。また、人種統合が実現していた公立学校における教育現場の実情を理解する。

・1940 年代末のアメリカ文学史の構築とその正典（すなわちキャノン"canon”）の形成について調べ、本作品が何をもってキャノンとしての地位を得たかをも含めて確認する。

・その結果、学校の教科書としてあまねく採用されるようになった状況（必修教科書としての特権的な位置）を理解し、教育現場での授業実践を理解する。

・論争のはじまりから 50 年以上を経過した本論争の経緯を追い、検討すべき課題や問題点を整理して、その概要を把握する。

・今日複雑な様相を呈する「文化戦争」の根底には、アメリカ文化の存立をめぐる基本的な認識の対立がある。本研究では、その対立を、いわゆる西欧的伝統に基づく価値観と、それに対抗する非西欧的価値観との対立にあるとみなす。

（参照：井川眞砂、「アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィン』論争――黒人描写と人種主義めぐって――」、『国際文化研究科論集』（東北大学大学院国際文化研究科、2004）、13－29 頁；Arac, Jonathan. *Huckleberry Finn As Idol and Target,* 1997; Born to Trouble: *Adventures of Huckleberry Finn*. Videocassette. Culture Shock. PBS. 26 Jan. 2000; Leonard, James S., Thomas A. Tenney, and Thadious M Davis, eds. *Satire or Evasion?* 1992.）

（２）トウェインの黒人描写は、実際、何がどのように問題なのか、作中の黒人描写は如何になされているか、また黒人の呼称「ニガー」はどんな頻度でどのように使用されているかについて、論争の原因とされる論点をテキスト上で分析し、それによってトウェインの人種観を検討する。なぜなら、1990 年代、本論争がもっとも激しくなっていたとき、その標的が作者に及び、「人種主義者トウェイン」を非難する議論が登場するに至ったからである。

その一方で、上記の非難に対し 1980 年代後半に提示されはじめた黒人描写に関する緻密な読みを検討する。それらの作業をとおして 19 世紀アメリカの白人作家トウェインの黒人描写における歴史的制約あるいは先駆性について考察する。

（参照：井川眞砂、「『ハックルベリー・フィンの冒険』におけるジムの描写と 20 世紀の検閲問題――ジェイムズ・M・コックスの見解」、『季刊・新英米文学研究』第 18 巻 4 号、総号 142 号、1987 年、28－35 頁；井川眞砂・新美澄子・福士久夫・村山淳彦編著『いま「ハック・フィン」をどう読むか』［京都修学社、1997］；井川眞砂、「『ハックルベリー・フィンの冒険』の手書き原稿――バッファロー・エリー郡立図書館の所蔵とランダムハウス版への抄録（I）、（II）」『英語青年』第 145 巻 1 号（研究社）1999 年 4 月、38－40；『英語青年』第 145 巻 2 号（研究社）1999 年 5 月、86－89；井川眞砂、「アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィン』論争――黒人描写と人種主義をめぐって――」、『国際文化研究科論集』［東北大学大学院国際文化研究科、2004］、13－29 頁；Cox, James M. “A Hard Book to Take,” 1985; Morrison, Toni. *Playing in the Dark*, 1992; Rawick,George. *From Sundown to Sunup,* 1972; Robinson, Forrest G. “The Characterization of Jim in *Huckleberry Finn*,” 1988; Sattelmeyer, Robert and J. Donald Crowley, eds. *One Hundred Years of Huckleberry Finn,* 1985）

（3）トウェインの人種観は如何に形成されたか。彼が育った少年時代の奴隷制度下のハンニバルを歴史的に跡づけ、「奴隷のいる社会」であった町の実相を考察することによって、作者の黒人観の形成とのかかわりを探る。

（See, Dempsey, Terrell. *Searching for Jim*, 2003; Wecter, Dixson. *Sam Clemens of Hannibal*, 1952.）

（4）本作品は、トウェインの黒人観がいかなる思想的変革を見せる中で執筆されたかを考察する。

作家としてのトウェインの文学的成長、ならびに思想上の変革を追いながら、本作品の成立過程を考察することによって、そこでの作者のスタンスを、今日の人種主義論争を念頭に置いて検討する。

検討対象のテキストは、本作品に先行する「ある真実の話」（1874）であり、その分析を通して思想上の変化を検討する。「ある真実の話」は、トウェインの文学的成長ならびに思想的な変革を示す「重要な画期」を示す作品であるとされるからである。

（See, Cummings, Sherwood. Afterword. *Sketches, New and Old. The Oxford Mark Twain*. Ed. Selley F. Fishkin, 1996. Messent, Peter. *The Short Works of Mark Twain,* 2001; 亀井俊介著『マーク・トウェインの世界』[南雲堂、1995]; 永原誠著『マーク・トウェインを読む』[山口書店、1992]）

４．研究成果

まず、本論争は、1957 年、教育現場の黒人生徒の父母たちから本作品が学校の必修教科書であることに「異議申し立て」が表明されたことによって始まった。それは、1950 年代後半の公民権運動の高まりの中でこそ、はじめて表面化しえた出来事であった。一方、その前提にある事実として、1940 年代末のアメリカ文学史の構築に際し、本書が「アメリカ文学の古典」としての地位を獲得した結果、とりわけ特権的な位置にあった。本研究はそこから出発して、以下の諸点を確認、または明らかにすることによって、現時点におけるつぎの成果を得た。

上記のとおり、本論争の背景として、つぎの２点を指摘できる。すなわち、

（１）第二次世界大戦後の 1940 年代末、「アメリカ文学史」の大々的な編纂事業が進められる中、本書はアメリカ文学におけるキャノンの地位（なかでもその最高の地位、すなわちアラックの言う「ハイパーキャノン＝アメリカ文学の精髄」という特権的な地位）を獲得し、小中高等学校ならびに大学における教材としてあまねく採用されるとともに、アメリカ文学研究や批評活動の中心に置かれるようになった。また、

（２）1950 年代末に高揚した公民権運動の歴史的な展開（学校における人種統合の実現や、公的機関に対する黒人たちの発言権の獲得等）といった新たな社会状況が生まれた。

そのような中、1957 年、ニューヨーク市にある学校教育現場の黒人生徒の父母たちが同市教育委員会に対し、本書が必修教科書であることを「異議申し立て」たのである。

その「異議申し立て」の理由としては、

（３）奴隷制時代の南部を舞台にした本書に、今日の差別用語である「ニガー」が 200 回以上使われるし、人種主義的な黒人描写がなされる場面も少なくない点をあげることができる。（事実、その点が本論争中、非難の対象となっている。）

（４）人種統合のなされた学校で、本書が教科書として使用されることによって、（白人生徒にひやかされたりする）黒人生徒が教室で傷ついたり苦悩したりする現実がある。

その「異議申し立て」の結果、

（５）1957 年 9 月、ニューヨーク市教育委員会は、正式に、小中学校の「認定教科書リスト」から本作品の除外を決定したのであり、（６）その決定が、ただちに『ニューヨークタイムズ』紙によって報じられ、やがてつぎつぎと、同様の公式決定がペンシルヴァニア州、ワシントン州、フロリダ州、テキサス州、アイオア州、ヴァージニア州およびイリノイ州などへと伝播していったのである。

（７）さらに本人種主義論争は、教育界にとどまらず、マスメディアを通して一般社会に広がり、学界や批評界をも巻き込んで、半世紀以上にわたり継続することになる。単純に二分することはできないものの、黒人の父母たちによる当初の「異議申し立て」を支持する陣営と、それに同意できない陣営とに大きく立場を分けるこの論争は、複雑に絡み合う今日の「文化戦争」の中で展開した。アメリカ文学の「古典」を文学教育の中でいかに取り扱うかの論点も含めた議論が展開された。

その中で迎えた本作品の「出版 100 周年記念祝賀」の年にあたる 1985 年が近づくころ、それを意識した本論争は、それゆえに最も激しくなり、1980 年代半ばから 90 年代にかけてそのピークを迎えた。Jonathan Arac の著

書のタイトル（*Huckleberry Finn As Idol and Target*）は、大きく二分された本論争の激しさをまさに表現したものになっている。

長期にわたるこの論争の成果としては、

（8）マーク・トウェインの黒人描写の両義性（「従順な奴隷としての仮面」と「仮面の背後の人間の尊厳や能力」）を洞察する精緻な読みが提示され、作品中の黒人ジムの複雑な性格を読み解く批評が 1980 年代後半から 90 年代にかけて展開された。

これによって、アメリカ文学における本作品の批評史上貴重な成果を得ることができた。同時に、19 世紀アメリカの白人作家トウェインの先駆性をも示すものとなった。ひろく社会を巻き込んだ本論争の中でこうした成果が得られたことは、きわめて興味深いことだといえよう。

（9）他にも、多文化社会における文学教育のための教授法の進展や、学校でのカリキュラム改革、さまざまな地域社会における本書をめぐる討論など、教育現場における実践上の成果が多数生まれた。

以上のとおり、本作品は、多くの人びとに親しまれてきた「アメリカ文学の古典」であるにもかかわらず、いやそれだからこそ、主人公の「自由の探求」と分かちがたく結びつく作中の奴隷制度や「人種の壁と摩擦」が、今日の人種主義論争として広く議論され、その社会的な存在としての受容の姿を示したのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

① 井川眞砂、「聴いたままを記したマーク・トウェインの＜ある真実の話＞――ストーリー・テラーの真摯な実験」、風呂本惇子・松本昇編『英語文学とフォークロア――歌、祭り、語り――』（南雲堂フェニックス、2008）、1－19 頁、査読有。

『ハックルベリー・フィンの冒険』に先行する「ある真実の話」（1874）の分析を通して、トウェインの思想上の変化を検討した。本短編では、「一人語り」の俗語（ヴァナキュラー）の技法が実験的に採用され、その技法は『ハックルベリー・フィンの冒険』における「一人称語り」を予兆させるものである。そればかりか、黒人レイチェル像はジム像をも予兆させる。本短編が、トウェインの文学的思想的成長における「重要な画期」を示す作品であることを改めて確認した。

② 井川眞砂、「サム・クレメンズのハンニバル――奴隷のいる社会」、『マーク・トウェイン研究と批評』（南雲堂）、第 7 号、10－23 頁、2008 年、査読有。

トウェインが少年時代をすごしたハンニバルの町は「奴隷のいる社会」であったが、1839 年に町は「奴隷条例」を制定し、奴隷の取り締まりを強化した。その取り締まりがもっとも厳しかった時期（1840－50 年代）に、トウェインは少年時代をこの町で過ごした。『ハックルベリー・フィンの冒険』の舞台ともなり母胎ともなったその町の実相を Terrell Dempsey, *Searching for Jim* (2003) を援用することによって考察し、トウェインの黒人観とのかかわりを探った。トウェインは「奴隷のいる社会」で起こったさまざまな現実を見て育ったのである。彼の南部的黒人観の基本は、この時期に形成された。

③ 井川眞砂、「『ハックルベリー・フィン』の手書き原稿とウィリアム・H・ルース」、『マーク・トウェイン研究と批評』（南雲堂）、第 7 号、4－8 頁、2008 年、査読有。

1990 年に新たに発見された『ハックルベリー・フィンの冒険』の手書き原稿前半部分 665 枚、それが発見されるまでの 100 余年間の原稿の足取り、その貴重な原稿を今日の競売と散逸の危機から護った「バッファロー・エリー公共図書館」の稀こう本室長ウィリアム・ルースの熱意と尽力を論じた。

この「手書き原稿」発見のニュースは、まさしく『ハックルベリー・フィンの冒険』をめぐる本人種主義論争のただ中で、それと並行する形で、合衆国内でじつに大きな話題となった。

〔学会発表〕（計　１　件）

井川眞砂、「マーク・トウェインと南部――トウェインの黒人描写をとおして見えてくるもの」、日本マーク・トウェイン協会、2007 年 10 月 12 日、広島経済大学。

作者トウェインとアメリカ南部との関わり、それも奴隷制度下のミズーリ州における人種主義的黒人観との関わりを探るため、トウェインが少年時代すごしたミズーリ州ハンニバルの町の実相を検討した。「奴隷のいる社会」という視座から検討した。

〔図書〕（計　１件）

デイヴィッド・R・ローディガー著、小原

豊志・竹中興慈・井川眞砂・落合明子・訳『アメリカにおける白人意識の構築――労働者階級の形成と人種』（明石書店、2006）、1 章 17～44 項、5 章 157～189 項

白人意識の研究ないしは白人性の研究（=Whiteness Studies）分野における古典的な地位を占める著書の翻訳である。合衆国における人種差別意識の根底をなす「白人性」意識が形成されたのは、独立革命期に特定できること、かつまたその契機は独立に伴う共和制への移行の結果、白人民衆の間に、黒人を奴隷に固定化する一方で自らを奴隷とは区別された自立的存在とみなす「共和主義的人種主義」が醸成されたことにある点を明らかにし、こうした特殊合衆国的市民意識である「共和主義的人種主義」の歴史的展開過程が考察される。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）
〔その他〕

６．研究組織

(1) 研究代表者
井川 眞砂
東北大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：３０１０４７３０
(2)研究分担者
(3)連携研究者